

紀南教会瓦版

発行所 ト教会
 紀南キリスト教会
 編集委員会 田辺市
 和歌山県 80
 下屋敷町
 TEL/EAX
 0739-25-1191

今夏も厳しい暑さでしたが、皆様にはお変わりなくお過ごしでしょうか。

八月一日・二・三日、第六三回キリストの教会全国大会を南紀白浜で開催しました。その準備のために八月の瓦版は休刊しました。

吹く風に冷たさを感じる季節、身を引き締めて再刊します。

どうぞよろしくお祈りいたします。 編集員一同

母を偲んで

肝臓ガンであることが分かって、本来の頑張りとも明るさを忘れなかつた母が八六才で亡くなり、十二月十五日で一年になります。私が十一月下旬介護のために帰郷し、母が気にか

けていた雑用を片付け、介護認定も受け、「看護師さん」に週一でお願いし、お風呂に入れてもらい、体調も診てもらえたらいいね」と話し、お弁当も試食し、安否確認を兼ねて、お昼のお弁

当を届けてもらおうということになり、来週からやってみようとお話していた矢先、突然熱を出し、救急車で運ばれ、そのまま入院、帰らぬ人となりました。母は入院した日の午後だけは、遺言のように次から次と話し続けました。そして、周囲の人達への感謝の言葉も忘れませんでした。そんな中、夢だったのが、本当たったのが、臨死体験をし、「危なかった！死ぬかと思った！と、目を覚まして言う母の言葉が何ともリアルでした。先に逝った父や叔母、「みんなに会ってきた。大きな山があつて、とても綺麗な所だった」と話し、「よかったね。行き先が分かって、もう安心

なりました。もう十二分に母との時間を過ごさせてもらったと思ひ、兎に角一度帰ろうと、娘家族と一緒に飛行場に戻った所で、母の訃報を聞ききました。私が行った来たりしなくてもいいようにとの、母の私への配慮だったのか、飛行機に乗る直前で本当に良かったと思ひました。

私が母と過ごした数週間、何物にも代え難く、私の知らない母の一面も発見できました。振り返れば十八才で家を出てから、あんなに長い時間を母と共有したことは無かつたことでした。本当に有り難く、何とも貴重な時間でした。大正時代の女性の強さ、たくましさを持ち、最後まで明るさを失わず、頑張り屋さんだった母。沢山涙を流し、苦労も多かつたはずですが、いい人生を送らせてもらったと、出会つた人達に心から感謝してました。私も心からの有り難うを神さまと母に送りたいです。

「鼓」

たしたちは神の(啓示の)光に照らされて、導かれて、自分が神の前にいかに無知で高慢で、罪多き者であるかということを知られるのです。そして、そのわたしたちを救うために神は、御子イエス・キリストをこの世に遣わし、御子の十字架の死によって、わたしたちの罪を贖い、さらに死からの復活によって、わたしたちをその復活の命に生かす、という福音へと導かれるのです。福音がわたしの福音となるのは、神は、こ

「どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていけば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまつてしまう。最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けました。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活

したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。(コリント信徒への手紙一 一五・二、五) 秋は無性に柿が食べたくなります。子供の頃、自分の家の柿の木の柿を食べるの、親戚の柿を取りに行ったことを思い出します。秋は望郷の念というのか、

いつさいは空である。」「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思ふ心を人に与えられた。」という有名な言葉が

る時、人間関係で深く傷つき悩む時、人は何もかも空しく感じ、孤独になるものです。不安定な、まことに頼りない時です。確固たる土台をどこにも見いだせず、生きる価値、意味を見出せなくなる時です。しかし、この時は、永遠の土台である神とその福音に出会うチャンスでもあります。

先日久し振りに星空を見上げたら、運良くカシオペア流星群の一つと思われ、流れ星がスーッと天空を横切つた。アツという思ふ間もない出来事だつたけれど、直接に、それよりも小さいのが別方向に消えていった。おまけつき・・・。

8月号がお休みでしたので11月号の発行に本来にあつという間の時間の経過を実感します。今年の夏は特に忙しかつたなあと振り返る間もなく、35号を発行すると直ぐにアドベントに入ります。まだまだ今年が終われません。次号、36号は2013年2月24日発行予定。

「私の福音となる」

紀南教会牧師 上山耕司

でしようか。空しさを感じるのは人間だけなんですね。旧約聖書コヘレトの書の冒頭に「何という空しさ、全ては空しい。(空の空、

ありませぬ。遙か昔から、多くの人が人生に空しさを感じ、永遠に思ひをはせていたのです。病の中で死を覚える時、仕事で行き詰ま

と少し残すところまで来てしまいましたが、毎年思ふ事ながら日々の流れの何と速いこと！何十年生きてきてもアツという間の様に感じられ、かつて共に過ごしてきた人達も本当に此の世に存在していたのだからとさえ思つてしまつ時さえある。

いづれ自分もその中の一人となつてしまつたのではあるけれど、広い宇宙から見ればほんの一瞬の此の世の生活にあつて歩いていく途中、ちゃんと道しるべがあるという事が何と頼もしく力強い事であろうか、只々感謝です。

今夏、私達の教会は同じ思いをもつ各地の兄弟姉妹と共に白浜の地で「主我を愛す」の課題で一つの集いを持ち、多くの恵の中でした。それは又、次の会へと繋がつていつて大きな希望となりました。

そんな事を繰り返しながら私達は日々を紡ぎ、その中で自分が生きていたからこそ出来る事を小さくても残していきたいと願うのかも知れないと思ひ、私自身もそう努めたく、天に宝を積む者でありたいと願つていきます。



先日久し振りに星空を見上げたら、運良くカシオペア流星群の一つと思われ、流れ星がスーッと天空を横切つた。アツという思ふ間もない出来事だつたけれど、直接に、それよりも小さいのが別方向に消えていった。おまけつき・・・。

時の流れの中で

光陰矢のごとしの言葉通り今年もあつた。おまけつき・・・。



(み)